

在住の高齢者で、身体障害者手帳、療育手帳、
（精神障害者）保健福祉手帳のいずれをも有
せず、また介護保険による要介護認定を受け
ていない、「健康」で「自立」していると考え
られる者の中で、調査時に入院していなかつ
た 4532 名を対象とした。

ICF 分類に立って、生活機能の 3 つのレ
ベル（「心身機能」、「活動」、「参加」）と「環
境因子」の大項目全て、ならびに「健康状態」
について調査用紙を作成した。この調査用紙
を用いた半構造的面接として自宅を民生委員
が訪問して調査した。本報告ではそのうち「活
動」「参加」についての分析結果について述べ
る。

（倫理面の配慮）

主任研究者の所属機関の倫理委員会にて審
査を受け、研究の承認を受けた。また当該自
治体の個人情報保護・管理等の規則に従い、
本研究について主任研究者との間で協定書を
締結している。

C. 研究結果ならびに考察

1. 回答者の群別特性及び人数

回答を 4288 名から得た（回収率 94.6%）。
うち、男性 2033 名、女性 2255 名、前期高
齢者（65～74 歳）2664 名（うち男性 1351 名、
女性 1313 名）、後期高齢者（75 歳以上）1624
名（うち男性 682 名、女性 942 名）であった。

以下の集計は前期高齢者・後期高齢者に分
け、そのそれぞれについて男女別に集計した。

2. 「活動」の状況

以下集計結果は、表には実数と比率（%）
を示したが、文中では各群間の比較を容易に
するために比率で述べる。

1) 歩行・移動・立ち上がり（ICF「活動」 の分類、第 4 章）

（1）外出状況

外出の状況を見たものが表 1 である。

まず第 1 選択肢であり、最も高い自立度の
状態を示す「一人で外出している」（第 2 選
肢の「近所のみ一人で外出している」と対比

表 1 外出の状況

	前期		後期		計	
	男	女	男	女	前期	後期
一人で外出	1235名 91.4%	1135名 86.4%	527名 77.3%	602名 63.9%	2370名 89.0%	1129名 69.5%
近所のみ一人で	40 3.0%	73 5.6%	53 7.8%	166 17.6%	113 4.2%	219 13.5%
誰かと一緒に外出	46 3.4%	80 6.1%	41 6.0%	99 10.5%	126 4.7%	140 8.6%
通院・通所のみ	14 1.0%	9 0.7%	33 4.8%	26 2.8%	23 0.9%	59 3.6%
外出していない	12 0.9%	8 0.6%	17 2.5%	35 3.7%	20 0.8%	52 3.2%
返答なし	4 0.3%	8 0.6%	11 1.6%	14 1.5%	12 0.5%	25 1.5%
計	1351 100%	1313 100%	682 100%	942 100%	2664 100%	1624 100%

するので、遠くまで一人で外出していること（示す）の率（％）について比較すると、前期高齢者では 2370 名 89.0%、後期高齢者では 1129 名 69.5%、であり、前期高齢者より後期高齢者で低い。また同年齢階層の中では男性より女性が低い傾向がある。一方、「近所のみ一人で」は 4.2%、13.5%であった。

ここで試みに、この「一人で外出している」を次の自立度のランクである「近所のみ一人で」と合計すると、前期高齢者で 93.2%、後期高齢者で 83.0%となり、差がかなり縮まる。また男女差も小さくなる。

これは同じ「外出自立」であっても、制限なくどこにでも自立して外出している状態と近所のみ限定して自立している状態を区別して試みるのが重要であることを示している。

我々の従来の研究によって、外出状況に限らず多くの「活動」項目について、従来 ADL (activities of daily living、日常生活行為) をはじめとする様々な「活動」(生活行為) の自立度において単に「自立」とされていたものを、「普遍的自立」(日常的に遭遇する多様な環境における自立) と「限定的自立」

(自宅およびその周辺、あるいは入院・入所中ならば病院・施設などの限られた環境のみにおける自立) との 2 つに分けることが重要であるとの知見がえられているが、この成績もそのような区別に重要な意義があることを示唆するものである。

その他、「誰かと一緒に外出」が 4.7%、8.6%、「通院・通所のみ」が 0.9%、3.6%、「外出していない」が 0.8%、3.2%であった。すなわち「健康」で「自立」していると考えられるこの群においても「自立」とはいえないか、きわめて制限されているものが前期高齢者で計 6.4%、後期高齢者で実に 15.4%に達することは注目すべきことである。

(2) 外出頻度

外出の頻度を見たものが表 2 である。

ここでも最も頻度の高い状態を示す「週 4 回以上」の者の率を比較すると、前期高齢者では 1573 名 59.0%、後期高齢者では 554 名 34.1%、であり、後期高齢者では前期高齢者の半分近くに減少している。また同年齢階層内の男女間にも差があり、女性で低い。

表 2 外出の頻度

	前期		後期		計	
	男	女	男	女	前期	後期
週 4 回以上	890 名 65.9%	683 名 52.0%	281 名 41.2%	273 名 29.0%	1573 名 59.0%	554 名 34.1%
週 2～3 回	263 19.5%	376 28.6%	193 28.3%	287 30.5%	639 24.0%	480 29.6%
週 1 回	52 3.8%	95 7.2%	54 7.9%	120 12.7%	147 5.5%	174 10.7%
月 1～3 回	80 5.9%	120 9.1%	91 13.3%	184 19.5%	200 7.5%	275 16.9%
ほとんどなし	42 3.1%	37 2.8%	49 7.2%	75 8.0%	79 3.0%	124 7.6%
返答なし	24 1.8%	2 0.2%	14 2.1%	3 0.3%	26 1.0%	17 1.0%
計	1351 100%	1313 100%	682 100%	942 100%	2664 100%	1624 100%

しかし、ここでも試みに「週4回以上」と「週2-3回」を加えて「週2回以上」としてみると前期高齢者で83.0%、後期高齢者で63.7%となり、差は少なくなる。また男女間の差もかなり縮まる。ここでも外出の頻度を細かく見ること、特に「週4回以上」という高齢者にとってはやや厳しいともいえる選択肢を設定することによって各種のサブグループの特性をよりよく反映できることがわかる。

その他「週2-3回」が24.0%、29.6%、「週1回」が5.5%、10.7%、「月1-3回」が7.5%、16.9%、「ほとんどなし」が3.0%、7.6%であった。特に「ほとんどなし」が決して少なく、これに「月1-3回」を加えた、外出頻度の極めて低いものが前期高齢者で10.5%、後期高齢者で24.6%とかなり高率であることも注目される。

(3) 外出の目的

外出という「活動」がどのような目的（「参加」とも関係をもつ）で行なわれているかを

みるために、主な外出の目的に関して項目別の回答（合計は100%以上）をみたものが表3である。

「外出していない」と答えたものが前期高齢者では20名0.8%、後期高齢者では52名3.2%であり、目的としては多い順に、「買い物」が72.7%、61.7%、「病院・医院への通院」が38.1%、53.2%、「散歩」が38.9%、34.1%、「出勤」が14.7%、3.2%であった。

ここでは「健康」であるはずの高齢者で「病院・医院への通院」が多く、4-5割に及ぶことが注目される。

(4) 公共交通機関の利用状況

外出と関連して、公共交通機関の利用状況を見たものが表4である。

「もともと電車・バスは利用していない」と答えたものが前期高齢者では935名35.1%、後期高齢者では645名39.7%にみられた。その他は多い順に、「一人でバス・電車を利用している」が57.1%、39.3%、「誰かと一緒に

表3 外出の目的（項目別）

	前期		後期		計	
	男	女	男	女	前期	後期
外出していない	12名 0.9%	8名 0.6%	17名 2.5%	35名 3.7%	20名 0.8%	52名 3.2%
買い物	831 61.5%	1106 84.2%	388 56.9%	614 65.2%	1937 72.7%	1002 61.7%
病院・医院への通院	471 34.9%	545 41.5%	351 51.5%	513 54.5%	1016 38.1%	864 53.2%
散歩	565 41.8%	471 35.9%	264 38.7%	289 30.7%	1036 38.9%	553 34.1%
出勤	324 24.0%	68 5.2%	41 6.0%	11 1.2%	392 14.7%	52 3.2%
その他	75 5.6%	17 1.3%	50 7.3%	11 1.2%	92 3.5%	61 3.8%
計	2278 168.6%	2215 168.7%	1111 162.9%	1473 156.4%	4493 168.7%	2584 159.1%

利用している」が 6.3%、13.8%、「タクシーのみ利用している」が 1.3%、5.7%、「障害のため利用していない」が 0.2%、1.3%、「バイク」が 0.0%、0.1%であった。

(5) 車の運転状況

同じく外出と関連して、車の運転状況を見たものが表5である。

「免許をもっていない」と答えたものが前期高齢者では 1377 名 51.7%、後期高齢者では 1250 名 77.0%、「車を運転している」が 43.7%、18.8%、「免許も車もあるが、今はしていない」が 2.6%、2.4%、「免許はあるが車がなくて今はしていない」が 1.7%、1.3%であった。

表4 公共交通機関の利用状況

	前期		後期		計	
	男	女	男	女	前期	後期
もともと電車・バスは利用していない	522 38.6%	413 31.5%	287 42.1%	358 38.0%	935 35.1%	645 39.7%
障害のため利用していない	4 0.3%	1 0.1%	6 0.9%	15 1.6%	5 0.2%	21 1.3%
一人でバス・電車を利用している	761 56.3%	760 57.9%	296 43.4%	342 36.3%	1521 57.1%	638 39.3%
誰かと一緒に利用している	52 3.8%	116 8.8%	64 9.4%	160 17.0%	168 6.3%	224 13.8%
タクシーのみ利用している	12 0.9%	23 1.8%	27 4.0%	66 7.0%	35 1.3%	93 5.7%
バイク	0 0.0%	0 0.0%	2 0.3%	0 0.0%	0 0.0%	2 0.1%
複数回答	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
返答なし	0名 0.0%	0名 0.0%	0名 0.0%	1名 0.1%	0名 0.0%	1名 0.1%
計	1351 100%	1313 100%	682 100%	942 100%	2664 100%	1624 100%

表5 車の運転状況

	前期		後期		計	
	男	女	男	女	前期	後期
免許をもっていない	345 25.5%	1032 78.6%	362 53.1%	888 94.3%	1377 51.7%	1250 77.0%
している	940 69.6%	225 17.1%	270 39.6%	36 3.8%	1165 43.7%	306 18.8%
免許も車もあるが、今はしていない	29 2.1%	40 3.0%	31 4.5%	8 0.8%	69 2.6%	39 2.4%
免許はあるが車がなくて今はしていない	35 2.6%	9 0.7%	15 2.2%	6 0.6%	44 1.7%	21 1.3%
その他	0 0.0%	1 0.1%	0 0.0%	1 0.1%	1 0.0%	1 0.1%
複数回答	2 0.1%	6 0.5%	4 0.6%	3 0.3%	8 0.3%	7 0.4%
計	1351 100%	1313 100%	682 100%	942 100%	2664 100%	1624 100%

(6) 自宅内移動

自宅内の歩行や移動に関して項目別の回答（合計は 100%以上）をみたものが表 6 である。

「一人で歩く」と答えた者が前期高齢者では 2616 名 98.2%、後期高齢者では 1540 名 94.8%と 9 割 5 分以上が一人で歩いていた。次の「伝って歩くことも」は 3.4%、9.3%であった。その他「見守り・介助」が 0.1%、0.5%、「四つ這いなど」が 0.1%、0.7%、「車椅子・自分で」が 0.0%、0.3%、「車椅子・介助」が 0.0%、0.1%、「室内移動なし」が 0.1%、0.3%であった。

ただ複数回答可であるため、計算によって歩行の際にもっぱら伝って歩いている者を推定すると、前期高齢者で 40 名 1.5%、後期高齢者で 53 名 3.3%にみられた。

「見守り・介助」から「室内移動なし」までの「自宅内歩行非自立」の合計は前期高齢者で 0.3%、後期高齢者で 1.8%であった。

(7) 歩行時の支援的な用具について

「支援的な用具」とは、ICFの「環境因子」の分類、第 1 章の「個人的な屋内外の移動と交通のための支援的な生産品と用具（福祉用具）〈e1201〉」であるが、その使用状況は歩行という「活動」と関係が深いのでここで述べる。

(i) 杖の種類

支援的な用具の使用状況のうち、杖類に関して項目別の回答（合計は 100%以上）をみたものが表 7-1 である。

「杖類は使っていない」者が前期高齢者では 2554 名 95.9%、後期高齢者では 1291 名 79.5%であった。「T 字杖、1 本杖」の者が 3.5%、15.4%、「四点杖（杖の先が四本）」は 0.2%、0.4%、「ウォーカーケイン」は 0.1%、0.2%、「シルバーカー」は 0.4%、7.6%であった。

表 6 自宅内の歩行や移動（項目別）

	前期		後期		計	
	男	女	男	女	前期	後期
一人で歩く	1330 名 98.4%	1286 名 97.9%	646 名 94.7%	894 名 94.9%	2616 名 98.2%	1540 名 94.8%
伝って歩くことも	37 2.7%	54 4.1%	57 8.4%	94 10.0%	91 3.4%	151 9.3%
見守り・介助	1 0.1%	1 0.1%	2 0.3%	6 0.6%	2 0.1%	8 0.5%
四つ這いなど	0 0.0%	2 0.2%	3 0.4%	8 0.8%	2 0.1%	11 0.7%
車椅子・自分で	0 0.0%	0 0.0%	2 0.3%	3 0.3%	0 0.0%	5 0.3%
車椅子・介助	0 0.0%	1 0.1%	0 0.0%	2 0.2%	1 0.0%	2 0.1%
室内移動なし	1 0.1%	2 0.2%	2 0.3%	3 0.3%	3 0.1%	5 0.3%
計	1369 101.3%	1346 102.5%	712 104.4%	1010 107.2%	2715 101.9%	1722 106.0%

このように杖類を使っているものは後期高齢者では比較的多い（約2割）が、ほとんどがT字杖であり、その他のものは非常に少なかった。

(ii) 杖類を使う時

いつ杖類を使用するかに関して項目別の回答（合計は100%以上）をみたものが表7-

2である。

「杖類は使っていない」と答えた者が前期高齢者では2554名95.9%、後期高齢者では1291名79.5%であった。「外出時はいつも」は1.5%、9.8%、「外出時は時々」は1.7%、6.3%、「自宅内でいつも」は0.3%、2.4%、「自宅内で時々」は0.4%、2.6%であった。

表7-1 使用している杖類の種類（項目別）

	前期		後期		計	
	男	女	男	女	前期	後期
杖類は使っていない	1309名 96.9%	1245名 94.8%	592名 86.8%	699名 74.2%	2554名 95.9%	1291名 79.5%
T字杖、1本杖	35 2.6%	59 4.5%	76 11.1%	174 18.5%	94 3.5%	250 15.4%
四点杖（杖の先が四本）	1 0.1%	3 0.2%	1 0.1%	6 0.6%	4 0.2%	7 0.4%
ウォーカーケイン	2 0.1%	0 0.0%	2 0.3%	1 0.1%	2 0.1%	3 0.2%
シルバーカー	1 0.1%	10 0.8%	4 0.6%	119 12.6%	11 0.4%	123 7.6%
その他	0 0.0%	1 0.1%	7 1.0%	4 0.4%	1 0.0%	5 0.3%
返答なし	3 0.2%	1 0.1%	1 0.1%	6 0.6%	4 0.2%	11 0.7%
計	1351 100%	1319 100.5%	683 100.1%	1009 107.1%	2670 100.2%	1692 100.3%

表7-2 杖類を使う時（項目別）

	前期		後期		計	
	男	女	男	女	前期	後期
杖類は使っていない	1309名 96.9%	1245名 94.8%	592名 86.8%	699名 74.2%	2554名 95.9%	1291名 79.5%
外出時はいつも	12 0.9%	29 2.2%	46 6.7%	113 12.0%	41 1.5%	159 9.8%
外出時は時々	16 1.2%	28 2.1%	26 3.8%	76 8.1%	44 1.7%	102 6.3%
自宅内でいつも	4 0.3%	4 0.3%	11 1.6%	28 3.0%	8 0.3%	39 2.4%
自宅内で時々	7 0.5%	4 0.3%	12 1.8%	31 3.3%	11 0.4%	43 2.6%
その他	2 0.1%	1 0.1%	5 0.7%	2 0.2%	3 0.1%	7 0.4%
返答なし	1 0.1%	4 0.3%	1 0.1%	13 1.4%	5 0.2%	14 0.9%
計	1351 100%	1315 100.2%	693 101.6%	962 102.1%	2666 100.1%	1655 102.0%

(iii) 装具の種類

装具の種類に関して項目別の回答（合計は100%以上）をみたものが表7-4である。

「装具は使っていない」と答えた者が前期高齢者では2638名99.0%、後期高齢者では1583名97.5%であった。「プラスチック製装具」は0.3%、0.9%、「両側支柱付（両側に金属の支柱がある）」は0.2%、0.4%、であった。このように装具を使っているものは杖類よりはるかに少なかった。

(iv) 装具を使う時

装具の使用に関して項目別の回答（合計は100%以上）をみたものが表7-5である。

「装具は使っていない」と答えた者が前期高齢者では2638名99.0%、後期高齢者では1583名97.5%であった。「外出時はいつも」は0.4%、0.9%、「外出時は時々」とは0.4%、0.6%、「自宅内でいつも」は0.3%、0.5%、「自宅内で時々」は0.1%、0.4%であった。

表7-3 使用している装具の種類（項目別）

	前期		後期		計	
	男	女	男	女	前期	後期
装具は使っていない	1343名 99.4%	1295名 98.6%	668名 97.9%	915名 97.1%	2638名 99.0%	1583名 97.5%
両側支柱付（両側に金属の支柱がある）	0 0.0%	5 0.4%	3 0.4%	4 0.4%	5 0.2%	7 0.4%
プラスチック製装具	1 0.1%	7 0.5%	2 0.3%	13 1.4%	8 0.3%	15 0.9%
その他	5 0.4%	3 0.2%	5 0.7%	1 0.1%	8 0.3%	6 0.4%
返答なし	2 0.1%	3 0.2%	4 0.6%	9 1.0%	5 0.2%	13 0.8%
計	1351 100%	1313 100%	682 100%	942 100%	2664 100%	1624 100%

表7-4 装具を使う時（項目別）

	前期		後期		計	
	男	女	男	女	前期	後期
装具は使っていない	1343名 99.4%	1295名 98.6%	668名 97.9%	915名 97.1%	2638名 99.0%	1583名 97.5%
外出時はいつも	2 0.1%	9 0.7%	5 0.7%	9 1.0%	11 0.4%	14 0.9%
外出時は時々	4 0.3%	6 0.5%	4 0.6%	6 0.6%	10 0.4%	10 0.6%
自宅内でいつも	1 0.1%	6 0.5%	4 0.6%	4 0.4%	7 0.3%	8 0.5%
自宅内で時々	1 0.1%	2 0.2%	2 0.3%	4 0.4%	3 0.1%	6 0.4%
その他	0 0.0%	1 0.1%	1 0.1%	2 0.2%	1 0.0%	3 0.2%
返答なし	1 0.1%	2 0.2%	2 0.3%	5 0.5%	3 0.1%	7 0.4%
計	1352 100.1%	1321 100.6%	686 100.6%	945 100.3%	2673 100.3%	1631 100.4%

(v) 車いすを使うとき
 いつ車椅子を使用するかに関して見たものが表7-5である。

「車椅子は使っていない」と答えた者が前期高齢者では2654名99.6%、後期高齢者では1589名97.8%であった。「外出時はいつも」は0.1%、0.6%、「外出時は時々」は0.1%、

0.8%、「病院の訓練の時」は0.1%、0.3%、「自宅内でいつも」は0.0%、0.1%、「自宅内で時々」は0.0%、0.1%であった。

(vi) 車いすの操作

車椅子の操作に関して見たものが表7-6である。

表7-5 車椅子を使う時

	前期		後期		計	
	男	女	男	女	前期	後期
車椅子は使っていない	1344名 99.5%	1310名 99.8%	672名 98.5%	917名 97.3%	2654名 99.6%	1589名 97.8%
病院の訓練の時	1 0.1%	2 0.2%	1 0.1%	4 0.4%	3 0.1%	5 0.3%
外出時はいつも	1 0.1%	1 0.1%	4 0.6%	5 0.5%	2 0.1%	9 0.6%
外出時は時々	2 0.1%	0 0.0%	2 0.3%	11 1.2%	2 0.1%	13 0.8%
自宅内でいつも	0 0.0%	0 0.0%	1 0.1%	0 0.0%	0 0.0%	1 0.1%
自宅内で時々	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 0.1%	0 0.0%	1 0.1%
その他	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
返答なし	3 0.2%	0 0.0%	2 0.3%	4 0.4%	3 0.1%	6 0.4%
計	1351 100%	1313 100%	682 100%	942 100%	2664 100%	1624 100%

表7-6 車椅子は自分でこぐか

	前期		後期		計	
	男	女	男	女	前期	後期
車椅子は使っていない	1344 99.5%	1310 99.8%	672 98.5%	917 97.3%	2654 99.6%	1589 97.8%
いつも自分でこいでいる	1 0.1%	1 0.1%	2 0.3%	3 0.3%	2 0.1%	5 0.3%
自宅内は自分だが、外出時はほぼ押ししてもらう	0 0.0%	1 0.1%	1 0.1%	1 0.1%	1 0.0%	2 0.1%
使う時はいつも押ししてもらっている	2 0.1%	0 0.0%	2 0.3%	12 1.3%	2 0.1%	14 0.9%
電動車椅子を使っている	0 0.0%	0 0.0%	1 0.1%	2 0.2%	0 0.0%	3 0.2%
その他	2 0.1%	0 0.0%	1 0.1%	2 0.2%	2 0.1%	3 0.2%
返答なし	2名 0.1%	1名 0.1%	3名 0.4%	5名 0.5%	3名 0.1%	8名 0.5%
計	1351 100%	1313 100%	682 100%	942 100%	2664 100%	1624 100%

「車椅子は使っていない」と答えた者が前期高齢者では 2654 名 99.6%、後期高齢者では 1589 名 97.8%であった。「使う時はいつも押ししてもらっている」は 0.1%、0.9%、「いつも自分でこいでいる」は 0.1%、0.3%、「自宅内は自分でこいでいるが、外出時はほとんど押ししてもらっている」は 0.0%、0.1%、「電動車椅子を使っている」は 0.0%、0.2%であった。このように「自分でこぐ」よりも「押ししてもらっている」が多く、特に後期女性高齢者では押ししてもらっているものが多かった。

(8) 床からの立ち上がり

床やじゅうたんからの立ち上がりに関して見たものが表 8 である。

「一人でしている」(手をついたり、つかまったりせずに)は前期高齢者では 2452 名 92.0%、後期高齢者では 1331 名 82.0%であり、後者で低かった。

このような差はむしろ、次の自立度ランクである「つかまって」(床に手をつけて又は物

につかまって立ち上がっている)を検討することで著明になる。

すなわち「つかまって」は前期高齢者で 7.6%、後期高齢者で 16.5%であり、その差は 2 倍以上となる。「一部介助」が 0.0%、0.4%、「全介助」が 0.0%、0.3%、「行っていない」が 0.3%、0.6%、「一人で+つかまって」が 0.0%、0.1%であった。

ここで試みに「一人でしている」と「つかまって」を加えてみると、前期高齢者で 99.7%、後期高齢者で 98.5%とほとんど同じになり、上のようにこの 2 つを分けて検討した時のような差をみるできない。

これは立ち上がりを一人で行っていても、手放して行っているか、床に手をついたり、つかまったりして立ち上がっているかどうかを区別してみるのが重要であることを示しており、ここにも先に述べた「普遍的自立」と「限定型自立」との違いをみるができる。

表 8 床やじゅうたんからの立ち上がり

	前期		後期		計	
	男	女	男	女	前期	後期
一人でしている	1249 名 92.5%	1203 名 91.6%	571 名 83.7%	760 名 80.7%	2452 名 92.0%	1331 名 82.0%
つかまって	96 7.1%	107 8.1%	102 15.0%	166 17.6%	203 7.6%	268 16.5%
一部介助	1 0.1%	0 0.0%	0 0.0%	6 0.6%	1 0.0%	6 0.4%
全介助	0 0.0%	0 0.0%	2 0.3%	3 0.3%	0 0.0%	5 0.3%
行っていない	4 0.3%	3 0.2%	5 0.7%	5 0.5%	7 0.3%	10 0.6%
一人で+つかまって	0 0.0%	0 0.0%	1 0.1%	1 0.1%	0 0.0%	2 0.1%
返答なし	1 0.1%	0 0.0%	1 0.1%	1 0.1%	1 0.0%	2 0.1%
計	1351 100%	1313 100%	682 100%	942 100%	2664 100%	1624 100%

(9) 階段の昇降時の手すりの使用

階段の昇り降りの際の手すりの使用に関して見たものが表9である。

「階段は使っていない」者が前期高齢者では663名24.9%、後期高齢者では618名38.1%であった。「全く手すりを用いない」者が40.5%、18.6%、「時々手すりを用いる」者は25.5%、22.5%、「いつも手すりを用いる」者は9.2%、20.9%であった。

このように「いつも手すりを用いる」者が前期高齢者の1割弱、後期高齢者の2割強にみられた。また「階段は使っていない」が25%～38%とかなり多いが、これは自宅の構造、外出先の状況などのために必要がない場合と、「活動」として制限されていて使えない場合との両方が含まれていると考えられ、今後の検討また設問の仕方の再検討が必要である。

2) 身の回りの生活行為

いわゆるADL（日常生活行為）のうち、前節で検討した起居・移動を除く身の回りの生活行為(セルフケア)についてここで述べる。

(1) 食事

食事のに関して見たものが表10である。

「普遍的自立」である「外出先でも自立」（レストラン・食堂や訪問先でも問題はない<セルフサービスの場合を含む>）と、「限定的自立」である「自宅内では自立」を分けて調べたことで興味ある結果を得た。すなわち「外出先でも自立」と答えた者は前期高齢者では1307名49.1%、後期高齢者では543名33.4%で前者でも半分を割っており、後者では約3分の1と低く、また両者間に大きな差があった。その他は「自宅内では自立」が50.5%、62.9%、「揃えてもらえば可」が0.3%、3.0%、「一部介助」が0.1%、0.1%、「全介助」が0.0%、0.2%、「経口摂取なし」0.0%、0.1%であった。

表9 階段の昇降時の手すりの使用

	前期		後期		計	
	男	女	男	女	前期	後期
階段は使っていない	327 24.2%	336 25.6%	248 36.4%	370 39.3%	663 24.9%	618 38.1%
全く手すりを用いない	631 46.7%	447 34.0%	177 26.0%	125 13.3%	1078 40.5%	302 18.6%
時々手すりを用いる	300 22.2%	379 28.9%	151 22.1%	214 22.7%	679 25.5%	365 22.5%
いつも手すりを用いる	93 6.9%	151 11.5%	106 15.5%	233 24.7%	244 9.2%	339 20.9%
計	1351 100%	1313 100%	682 100%	942 100%	2664 100%	1624 100%

この場合も「外出先でも自立」と「自宅内では自立」を加えてみると、前期高齢者では99.6%、後期高齢者では96.3%とほぼ等しくなり、分けてみたときのような大きな差はなくなる。

以上からここでも「普遍的自立」をみると活動の僅かな低下を敏感に検知することに役立つといえよう。

(2) 更衣

着替えに関して見たものが表11である。

同じく「普遍的自立」である「あらゆる衣服で可」（ネクタイをする、着物を着る等、社会生活に必要なあらゆる衣服を自分で出し入れし、着たり脱いだりしている）の率は前期高齢者では1993名74.8%、後期高齢者では913名56.2%で後者が低かった。

表10 食事

	前期		後期		計	
	男	女	男	女	前期	後期
外出先でも自立	632名 46.8%	675名 51.4%	235名 34.5%	308名 32.7%	1307名 49.1%	543名 33.4%
自宅内では自立	713 52.8%	632 48.1%	426 62.5%	595 63.2%	1345 50.5%	1021 62.9%
揃えてもらえば可	4 0.3%	4 0.3%	17 2.5%	32 3.4%	8 0.3%	49 3.0%
一部介助	1 0.1%	1 0.1%	2 0.3%	0 0.0%	2 0.1%	2 0.1%
全介助	0 0.0%	0 0.0%	1 0.1%	2 0.2%	0 0.0%	3 0.2%
経口摂取なし	0 0.0%	0 0.0%	1 0.1%	1 0.1%	0 0.0%	2 0.1%
返答なし	1 0.1%	1 0.1%	0 0.0%	4 0.4%	2 0.1%	4 0.2%
計	1351 100%	1313 100%	682 100%	942 100%	2664 100%	1624 100%

表11 着替え

	前期		後期		計	
	男	女	男	女	前期	後期
あらゆる衣服で可	1056名 78.2%	937名 71.4%	432名 63.3%	481名 51.1%	1993名 74.8%	913名 56.2%
自宅内衣服なら可	259 19.2%	366 27.9%	204 29.9%	436 46.3%	625 23.5%	640 39.4%
準備してもらえば	29 2.1%	2 0.2%	37 5.4%	8 0.8%	31 1.2%	45 2.8%
一部介助	5 0.4%	2 0.2%	5 0.7%	10 1.1%	7 0.3%	15 0.9%
全介助	1 0.1%	0 0.0%	2 0.3%	2 0.2%	1 0.0%	4 0.2%
返答なし	1 0.1%	6 0.5%	2 0.3%	5 0.5%	7 0.3%	7 0.4%
計	1351 100%	1313 100%	682 100%	942 100%	2664 100%	1624 100%

以下「環境限定型自立」である、「自宅内衣服なら可」が 23.5%、39.4%であり、その他「準備してもらえば」が 1.2%、2.8%、「一部介助」が 0.3%、0.9%、「全介助」が 0.0%、0.2%であった。この場合も「あらゆる衣服で可」と「限定的自立」である「自宅内衣服なら可」(自宅の中で着るような衣類は自分で出し入れと着たり脱いだりをしている)とをあわせてみると、前期高齢者で 98.3%、後期高齢者で 95.6%と共に非常に高く、上に述べたような著明な差は明らかでなくなる。このようにこの項目でも単に「自立」を見るのではなく「普遍的自立」と「限定的自立」とを区別することの妥当性が確認されたといつてよい。

(3) 整容(身だしなみ)

身だしなみに関して見たものが表 12 である。

「普遍的自立」である「外出先でも自立」と答えた者が前期高齢者では 2337 名 87.7%、後期高齢者では 1085 名 66.8%と後者で低

かった。その他、「環境限定型自立」である「自宅内では自立」が 11.7%、31.5%であり、その他「準備・見守り」が 0.3%、0.2%、「一部介助」が 0.2%、1.0%、「全介助」が 0.0%、0.2%であった。

しかしここでも「外出先でも自立」と「自宅内では自立」とを加えてみると、前期高齢者で 99.5%、後期高齢者で 98.3%と差がなくなり、ここでも「普遍的自立」を独立させることで、各群間の特徴が明確になることが明らかである。

(4) 入浴

入浴に関して見たものが表 13 である。

「普遍的自立」である「どこでも自立」(温泉旅館の大浴場など、どのような場所でも問題なし)と答えた者が前期高齢者では 2334 名 87.6%、後期高齢者では 1017 名 62.6%と後者が少なかった。「環境限定型自立」である、「自宅内では自立」が 11.7%、34.6%であり、その他「浴槽出入り見守り」が 0.2%、0.9%、

表 12 身だしなみ

	前期		後期		計	
	男	女	男	女	前期	後期
外出先でも自立	1174 名 86.9%	1163 名 88.6%	476 名 69.8%	609 名 64.6%	2337 名 87.7%	1085 名 66.8%
自宅内では自立	169 12.5%	144 11.0%	199 29.2%	313 33.2%	313 11.7%	512 31.5%
準備・見守り	4 0.3%	3 0.2%	1 0.1%	2 0.2%	7 0.3%	3 0.2%
一部介助	3 0.2%	1 0.1%	5 0.7%	11 1.2%	4 0.2%	16 1.0%
全介助	0 0.0%	0 0.0%	1 0.1%	2 0.2%	0 0.0%	3 0.2%
返答なし	1 0.1%	2 0.2%	0 0.0%	5 0.5%	3 0.1%	5 0.3%
計	1351 100%	1313 100%	682 100%	942 100%	2664 100%	1624 100%

「一部介助」が 0.2%、0.8%、「全介助」と
が 0.0%、0.3%、「特殊浴槽で介助」が 0.0%、
0.2%であった。

ここでも「どこでも自立」に「限定的自立」
である「自宅内では自立」を加えてみると、
前期高齢者で 99.4%、後期高齢者で 97.2%と、

上記のような差が不明瞭になる。ここでも「普
遍的自立」の基準を設けることの妥当性が明
らかである。

(5) 排泄

排泄（トイレ）（大、小の両方を含む）に関
して見たものが表 14 である。

表 13 入浴

	前期		後期		計	
	男	女	男	女	前期	後期
どこでも自立	1201名 88.9%	1133名 86.3%	474名 69.5%	543名 57.6%	2334名 87.6%	1017名 62.6%
自宅内では自立	142 10.5%	171 13.0%	195 28.6%	367 39.0%	313 11.7%	562 34.6%
浴槽出入り見守り	1 0.1%	3 0.2%	2 0.3%	12 1.3%	4 0.2%	14 0.9%
一部介助	4 0.3%	2 0.2%	7 1.0%	6 0.6%	6 0.2%	13 0.8%
全介助	1 0.1%	0 0.0%	1 0.1%	4 0.4%	1 0.0%	5 0.3%
特殊浴槽で介助	0 0.0%	0 0.0%	1 0.1%	3 0.3%	0 0.0%	4 0.2%
返答なし	2 0.1%	4 0.3%	2 0.3%	7 0.7%	6 0.2%	9 0.6%
計	1351 100%	1313 100%	682 100%	942 100%	2664 100%	1624 100%

表 14 排泄（トイレ）

	前期		後期		計	
	男	女	男	女	前期	後期
どこでも自立	1191名 88.2%	1125名 85.7%	489名 71.7%	586名 62.2%	2316名 86.9%	1075名 66.2%
自宅内昼夜自立	157 11.6%	182 13.9%	185 27.1%	339 36.0%	339 12.7%	524 32.3%
自宅で昼のみ自立	1 0.1%	1 0.1%	3 0.4%	4 0.4%	2 0.1%	7 0.4%
一部介助	0 0.0%	1 0.1%	0 0.0%	1 0.1%	1 0.0%	1 0.1%
全介助	1 0.1%	0 0.0%	0 0.0%	1 0.1%	1 0.0%	1 0.1%
オムツ使用	1 0.1%	0 0.0%	1 0.1%	2 0.2%	1 0.0%	3 0.2%
その他	0 0.0%	1 0.1%	0 0.0%	0 0.0%	1 0.0%	0 0.0%
返答なし	0 0.0%	3 0.2%	4 0.6%	9 1.0%	3 0.1%	13 0.8%
計	1351 100%	1313 100%	682 100%	942 100%	2664 100%	1624 100%

「普遍性自立」である「どこでも自立」（公共のトイレ、訪問先のトイレなど、どんな場所でも問題ない。和式のしゃがみ便器、男子小用の立ち便器、自動車式トイレなどを含む）と答えた者が前期高齢者では2316名86.9%、後期高齢者では1075名66.2%であり、後者で低かった。「環境限定型自立」である、「自宅内昼夜自立」が12.7%、32.3%で、その他「自宅で昼のみ自立」が0.1%、0.4%、「一部介助」が0.0%、0.1%、「全介助」が0.0%、0.1%、「オムツ使用」が0.0%、0.2%であった。

しかしこれまでと同様に「どこでも自立」と「自宅内昼夜自立」とを合計すると、前期高齢者では99.7%、後期高齢者では98.5%とこのような差は明瞭でなくなる。このように自立を「普遍的自立」と「限定型自立」とに分けることの妥当性は排泄においても確認さ

れた。

3) 意思疎通（コミュニケーション）

意思疎通（コミュニケーション）に関して見たものが表15である。

「普遍的自立」に準ずる、「電話、手紙を含め、誰とでもどんな方法でも十分に意思を伝えられる」と答えた者が前期高齢者では2426名91.1%、後期高齢者では1247名76.8%であり、差がみられた。「環境限定型自立」に準ずる、「家庭内または限られた人となら十分に意思疎通している」は7.2%、16.3%であり、その他「時間や手間がかかるが、家族や限られた人とは一応意思疎通している」は0.8%、3.4%、「ごく簡単な内容のみ、意思疎通している」は0.8%、3.1%、「意思疎通は全くできない」は0.1%、0.4%であった。

表15 意思疎通（コミュニケーション）

	前期		後期		計	
	男	女	男	女	前期	後期
電話、手紙を含め、誰とでもどんな方法でも十分に意思を伝えられる	1237 91.6%	1189 90.6%	563 82.6%	684 72.6%	2426 91.1%	1247 76.8%
家庭内または限られた人となら十分に意思疎通している	89 6.6%	103 7.8%	79 11.6%	186 19.7%	192 7.2%	265 16.3%
時間や手間がかかるが、家族や限られた人とは一応意思疎通している	12 0.9%	10 0.8%	21 3.1%	35 3.7%	22 0.8%	56 3.4%
ごく簡単な内容のみ、意思疎通している	13 1.0%	8 0.6%	17 2.5%	33 3.5%	21 0.8%	50 3.1%
意思疎通は全くできない	0 0.0%	2 0.2%	2 0.3%	4 0.4%	2 0.1%	6 0.4%
電話できない	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
複数回答	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
返答なし	0名 0.0%	1名 0.1%	0名 0.0%	0名 0.0%	1名 0.0%	0名 0.0%
計	1351 100%	1313 100%	682 100%	942 100%	2664 100%	1624 100%

「電話、手紙を含め、誰とでもどんな方法でも十分に意思を伝えられる」と「家庭内または限られた人となら十分に意思疎通している」とを合計すると前期高齢者で98.3%、後期高齢者で93.1%と差が非常に少なくなる。ここでもこの2つを分けることに妥当性があった。

II. 「参加」の具体像としての「活動」の状況

「参加」の具体像としての「活動」の状況についての結果は以下の通りであった。

1) 家庭生活：料理

料理に関して見たものが表16である。

一見して明らかなように男女差が非常に大きい。男女計でみると、「ほぼ毎日している」と答えた者が前期高齢者では868名32.6%、後期高齢者では332名20.4%と差があったが、男女別にみると、男性では全体に少なく、前期高齢者と後期高齢者の間の差はむしろ逆転しており、女性での年齢階層による差が大きかった（前期高齢者57.0%、後期高齢者

28.0%）。「限られたメニュー」が男女計で16.9%、18.1%、「簡単なもののみ」が10.1%、16.3%、「以前は(+)今は(-)」が3.2%、11.3%であり、このいずれでも男性の方が女性の半分以下であった。「もともと(-)」が37.2%、33.9%であったが、これは男性が非常に多く（約7割）、女性では少なかった。

2) 掃除・洗濯・布団干し・ごみ捨て

掃除・洗濯・布団干し・ごみ捨てに関して見たものが表17である。

前項の「料理」ほどではないが、ここでも男女差が大きい。すなわち「もともとこのような家事をしていなかった」と答えた者が前期高齢者では504名18.9%、後期高齢者では248名15.3%であったが、いずれも男性では33%~36%で、女性では極めて僅か（1.4%~2.7%）であった。「これら全部を問題なくしている」は54.9%、41.1%であり、男性で3割強に対し、女性では前期は8割弱、後期は

表16 料理をつくること

	前期		後期		計	
	男	女	男	女	前期	後期
ほぼ毎日している	120名 8.9%	748名 57.0%	68名 10.0%	264名 28.0%	868名 32.6%	332名 20.4%
限られたメニュー	146 10.8%	304 23.2%	72 10.6%	222 23.6%	450 16.9%	294 18.1%
簡単なもののみ	104 7.7%	166 12.6%	61 8.9%	203 21.5%	270 10.1%	264 16.3%
以前は(+)今は(-)	31 2.3%	53 4.0%	17 2.5%	166 17.6%	84 3.2%	183 11.3%
もともと(-)	950 70.3%	42 3.2%	464 68.0%	87 9.2%	992 37.2%	551 33.9%
計	1351 100%	1313 100%	682 100%	942 100%	2664 100%	1624 100%

5 割弱であった。「ある程度はしている」は 19.5%、29.4%、「ごく一部しかしていない」は 5.4%、8.6%、「以前はしていたが、今は全くしていない」は 1.3%、5.5%であった。

3) 仕事

仕事に関して見たものが表 18 である。

男女差がある程度あり、「一般の職業で収入」と答えた者が前期高齢者では 467 名

17.5% (男性 25.1%、女性 9.7%)、後期高齢者では 80 名 4.9% (男性 8.2%、女性 2.5%) であった。また、「したいが機会(-)」が 12.0% (男性 18.0%、女性 5.9%)、7.5% (男性 13.6%、女性 3.1%) であった。その他、「福祉工場等」が 0.1%、0.1%、「ボランティア」が 3.3%、1.8%であった。「あてはまらない」が 67.0%、85.5%と多いことが目立った。

表 17 掃除・洗濯・布団干し・ごみ捨て

	前期		後期		計	
	男	女	男	女	前期	後期
返答なし	0名 0.0%	0名 0.0%	0名 0.0%	0名 0.0%	0名 0.0%	0名 0.0%
もともこのような家事をしていなかった	486 36.0%	18 1.4%	223 32.7%	25 2.7%	504 18.9%	248 15.3%
これら全部を問題なくしている	431 31.9%	1031 78.5%	210 30.8%	458 48.6%	1462 54.9%	668 41.1%
ある程度はしている	299 22.1%	220 16.8%	176 25.8%	302 32.1%	519 19.5%	478 29.4%
ごく一部しかしていない	117 8.7%	27 2.1%	49 7.2%	91 9.7%	144 5.4%	140 8.6%
以前はしていたが、今は全くしていない	18 1.3%	17 1.3%	24 3.5%	66 7.0%	35 1.3%	90 5.5%
複数回答	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
計	1351 100%	1313 100%	682 100%	942 100%	2664 100%	1624 100%

表 18 仕事

	前期		後期		計	
	男	女	男	女	前期	後期
一般の職業で収入	339名 25.1%	128名 9.7%	56名 8.2%	24名 2.5%	467名 17.5%	80名 4.9%
福祉工場等	2 0.1%	0 0.0%	0 0.0%	2 0.2%	2 0.1%	2 0.1%
ボランティア	48 3.6%	39 3.0%	17 2.5%	13 1.4%	87 3.3%	30 1.8%
したいが機会(-)	243 18.0%	78 5.9%	93 13.6%	29 3.1%	321 12.0%	122 7.5%
あてはまらない	717 53.1%	1068 81.3%	515 75.5%	874 92.8%	1785 67.0%	1389 85.5%
返答なし	2 0.1%	0 0.0%	1 0.1%	0 0.0%	2 0.1%	1 0.1%
計	1351 100%	1313 100%	682 100%	942 100%	2664 100%	1624 100%

4) 趣味

趣味、レクリエーション、スポーツなどの余暇活動に関して見たものが表 19 である。

「十分にしている」と答えた者が前期高齢者では 665 名 25.0%、後期高齢者では 217 名 13.4%、「ある程度している」が 43.8%、43.5%、「一部のみ」が 11.8%、11.8%、「全くしていない」が 10.1%、17.4%、「もともと趣味(-)」が 9.3%、13.9%、「機会がない」が 0.0%、0.0%であった。

「十分にしている」と「ある程度している」とを合計したものは前期高齢者で 68.8%、後期高齢者では 56.9%であり、半数以上が「ある程度」以上の参加をしていた。

Ⅲ 「参加」の状況

「参加」(participation)とは、「生活・人生への関与」であり、関与とはある状況にかかわり、その中でなんらかの役割を果たすことである。これは ICF によって導入された

新しい概念であるために正しく理解されにくい点があり、「社会参加」といいかえて使われることも少なくない。しかしそれは、厳密に言えば誤解であり、「参加」は社会参加を含むがそれにとどまるものではない。ICF の分類に則していえば、家庭生活、対人関係の中での役割の遂行、教育、雇用・就労、経済生活、社会生活、市民生活(宗教・政治・文化生活を含む)への関与などの広い範囲にわたるものである。

本調査では高齢であることを考慮して、「参加」については「家庭生活上の役割」、「家庭経済上の役割」、「地域社会への参加」の 3 点について調査した。

1) 家庭生活上の役割

家庭生活に関して見たものが表 20 である。家庭生活上の役割を、「十分果たしている」と答えた者が前期高齢者では 1600 名 60.1%、

19 趣味・レクリエーション・スポーツ

	前期		後期		計	
	男	女	男	女	前期	後期
十分にしている	397名 29.4%	268名 20.4%	119名 17.4%	98名 10.4%	665名 25.0%	217名 13.4%
ある程度している	569 42.1%	597 45.5%	315 46.2%	392 41.6%	1166 43.8%	707 43.5%
一部のみ	149 11.0%	166 12.6%	77 11.3%	115 12.2%	315 11.8%	192 11.8%
全くしていない	109 8.1%	159 12.1%	90 13.2%	193 20.5%	268 10.1%	283 17.4%
もともと趣味(-)	127 9.4%	122 9.3%	81 11.9%	144 15.3%	249 9.3%	225 13.9%
機会がない	0 0.0%	1 0.1%	0 0.0%	0 0.0%	1 0.0%	0 0.0%
計	1351 100%	1313 100%	682 100%	942 100%	2664 100%	1624 100%

後期高齢者では590名 36.3%で後期高齢者で低かった。「ある程度果たす」が 22.6%、32.8%、「一部分果たしている」が 7.7%、17.5%、「果たしていない」が 0.7%、3.4%、「あてはまらない」が 8.9%、9.9%であった。これらのいずれにおいても男女差は著明ではなかった。

2) 家庭経済上の役割

「家庭経済上の役割」は一家の生計への本人の寄与度を訊ねるものであり、その結果が表 21 である。

「全て担う」と答えた者が前期高齢者では 981名 36.8%、後期高齢者では 333名 20.5%で後者が低い。また男女差があり男性に高い(前期高齢者では男性 50.4%、女性 22.8%、後期高齢者では男性 30.6%、女性 13.2%)、「ある程度担う」が 31.0%、24.4%であり、男女差は前期高齢者ではほとんどなく、後期高齢者では男性 3割対女性 2割であった。「一部分のみ寄与」が 11.7%、21.4%、「寄与できない」が 7.1%、14.4%、「もともとない」が 13.0%、19.3%であった。

表 20 家庭生活上の役割

	前期		後期		計	
	男	女	男	女	前期	後期
十分果たしている	778名 57.6%	822名 62.6%	270名 39.6%	320名 34.0%	1600名 60.1%	590名 36.3%
ある程度果たす	371 27.5%	232 17.7%	260 38.1%	273 29.0%	603 22.6%	533 32.8%
一部分果たしている	85 6.3%	119 9.1%	82 12.0%	203 21.5%	204 7.7%	285 17.5%
果たしていない	12 0.9%	7 0.5%	15 2.2%	41 4.4%	19 0.7%	56 3.4%
あてはまらない	105 7.8%	133 10.1%	55 8.1%	105 11.1%	238 8.9%	160 9.9%
計	1351 100%	1313 100%	682 100%	942 100%	2664 100%	1624 100%

表 21 家庭経済上の役割

	前期		後期		計	
	男	女	男	女	前期	後期
全て担う	681名 50.4%	300名 22.8%	209名 30.6%	124名 13.2%	981名 36.8%	333名 20.5%
ある程度担う	389 28.8%	438 33.4%	209 30.6%	187 19.9%	827 31.0%	396 24.4%
一部分のみ寄与	106 7.8%	207 15.8%	124 18.2%	224 23.8%	313 11.7%	348 21.4%
寄与できない	131 9.7%	66 5.0%	117 17.2%	117 12.4%	197 7.4%	234 14.4%
もともとない	44 3.3%	302 23.0%	23 3.4%	290 30.8%	346 13.0%	313 19.3%
計	1351 100%	1313 100%	682 100%	942 100%	2664 100%	1624 100%

3) 地域社会への参加

地域社会生活・市民活動に関して見たものが表 22 である。

全般的に低く、「十分に参加」と答えた者が前期高齢者では 303 名 11.4%、後期高齢者では 98 名 6.0%、「ある程度参加」が 35.4%、20.1%、「ごく一部参加」が 34.1%、40.7%、「参加していない」が 17.3%、31.9%、「あてはまらない」が 1.8%、1.3%であった。男女差はそれほど著明ではないが、「十分に参加」と「ある程度参加」では男性の方がやや多かった。

D. 総括的考察

以上、在宅非要介護認定高齢者（障害関係手帳類不所持者）の生活機能の現状をみると、ふつう「健康」で「自立」していると思われがちな一般の高齢者でも「活動」「参加の具体像としての活動」また「参加」に問題をもっている人が決して少なくないこと、それが特

に後期高齢者に多いことがわかる。

特に「活動」において、「普遍的自立」と「環境限定型自立」を分けてみることにより、一見「自立」しているようにみえても「普遍的自立」に達しえず「環境限定型自立」にとどまる者が少なくないことが確認された。このような限定された自立状態は、訪問リハビリテーションを必要とするような「非自立」に転落する危険の大きい状態であり、いわば訪問リハビリテーション必要者の「予備軍」であるといえることができる。

これは予防的な意味を含めての訪問リハビリテーションを既に必要としているか、今後必要とする可能性の大きい「ハイリスク」群に属するかするものが、このような一般高齢者に少なからず存在していることを意味している。

なお「参加」および「参加の具体像としての活動」の多くの項目には男女差がみられた。

表 22 地域社会への参加

	前期		後期		計	
	男	女	男	女	前期	後期
十分に参加	180名 13.3%	123名 9.4%	64名 9.4%	34名 3.6%	303名 11.4%	98名 6.0%
ある程度参加	500 37.0%	442 33.7%	170 24.9%	156 16.6%	942 35.4%	326 20.1%
ごく一部参加	411 30.4%	497 37.9%	261 38.3%	400 42.5%	908 34.1%	661 40.7%
参加していない	238 17.6%	224 17.1%	175 25.7%	343 36.4%	462 17.3%	518 31.9%
あてはまらない	22 1.6%	27 2.1%	12 1.8%	9 1.0%	49 1.8%	21 1.3%
計	1351 100%	1313 100%	682 100%	942 100%	2664 100%	1624 100%

E. 結論

1 地方都市の在宅高齢者の ICF にもとづく生活機能の調査により、普通「健康で自立している」と考えられがちな一般の高齢者においても、意外に多くのものが「活動」「参加の具体像としての活動」「参加」に問題を有しており、予防的な意味を含めての訪問リハビリテーションを既に必要としているか、今後必要とする可能性をもつと考えられることが確認され、今後の訪問リハビリテーション・システムの構築のための貴重な示唆が得られた。

F. 健康危険情報

特になし